

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2020/01/07 ～2020/05)

感染症の影響で、留学を3月末に中断し帰国しました。慌ただしく、正直ほんの少ししか過ごすことのできなかつた春semesterでしたが、時系列順に書いていこうと思います。

1. 勉学の状況

春semesterで履修した授業は以下の通りです。

- ・ Beginner's Course in Swedish for Exchange Students, level A2
- ・ Beginner's Course in Swedish for Exchange Students, level B1
- ・ The Swedish Model
- ・ Introduction to Special Education in a Swedish Context
- ・ Teaching Practice

ただし、3月中旬から大学で開講されるすべての授業がオンラインに移行したこともあり、私は単位互換の必要がないため途中で履修を終えた授業もいくつかあります。以下、授業ごとに少し振り返ってみようと思います。

- Beginner's Course in Swedish for Exchange Students, level A2
- Beginner's Course in Swedish for Exchange Students, level B1

A2については、集中講義の形式で履修しました。集中講義はたいてい休暇の季節に開講され、9時から15時までの授業が約2週間強ほぼ毎日続きます。2020年は、1月16日あたりから大学の春semesterが始まりましたが、このスウェーデン語のコースは1月8日から始まりました。

レベルが上がったということもあり、授業は基本的にすべてスウェーデン語で行われます。また、インプットよりもアウトプットが重視され、スピーキングの活動にかなりのウエイトが置かれていました。普段、英語が多い環境に身を置いていた私にとってはとてもよい機会でした。

ただし、人数が10人以下ととても少ない中、そのほとんどはドイツ語話者であったことから、言語習得のスピードにかなりの差がありました。(ドイツ語とスウェーデン語はかなり似ているといわれており、実際友人に聞いたところ言語を習っていてもなんとなくお互いの単語の意味を想像してあてることのできるレベルとっていました。) そのことから、自分のスウェーデン語の拙さに悔しくなり焦る日々が続きました。また、ほぼ毎日5時間以上スウェーデン語に集中しなくてはいけない生活は少しハードにも感じました。

A2の口述試験、筆記試験を無事2月上旬に突破した後、2月中旬からB1のコ

ースが始まりました。本来であれば5月の中頃までを予定していましたが、1か月も満たないうちにオンラインのコースへと移行してしまいました。

- The Swedish Model

主に社会福祉や社会学について、スウェーデンのことを中心にヨーロッパのことまで広く学ぶ授業です。週に1回程度の授業が1月末から5月中旬まで続きます。2回レクチャー式の講義を受けたのち、4、5人のグループでテーマに沿った資料を作り発表、軽くディスカッションを行うという形式でした。

この授業に臨むことは、非常に大変でした。特に、社会学について学習したことがなかった私は背景知識もなく、さらに、少人数グループに積極的に参加しようとしても英語力の拙さに悩み予習や復習、課題に時間を費やす日々を過ごしました。

- Introduction to Special Education in a Swedish Context

スウェーデンの、特別なニーズを要する子どもたちに対する教育について学ぶ授業です。週に2回程度の授業が1月末から3月末まで続きます。授業は継続して1つのテーマを扱うというよりは、オムニバス形式で毎回テーマごとに先生が変わるといような形式をとっていました。毎回授業で、ディスカッションや意見交換、出身の国についてシェアするような時間が多く設けられるため、参加しながら授業が進んでいくような印象を受けました。

この授業で取り扱う特別支援教育について知識が乏しくても、こういった特徴があるのかということや診断基準など基本的なことから講義を受けることができます。また、3回ほど実際に現地の学校に見学に行ったり、特別支援教育をサポートする地方自治体の機関にお話を伺いにいたりする機会も設けられています。実際に子どもたちがいる中で施設を見学し、特別支援にかかわる先生のお話を聞くことができました。特別支援教育や教育について興味がある方にとってもおすすめです。

- Teaching Practice

自分が希望する学校にセメスターを通して30日間ほど行きながら教育実習を行う授業です。1月上旬に、希望していた配属先についての情報が大学から送られてくるので、自分で担当教員とやり取りをして日程などを決めます。私は、1月はスウェーデン語の集中講義で忙しかったため、2月上旬から1週間に2日間ほど基礎学校(スウェーデンの義務教育段階にあたる学校。第1~9学年までが在籍している。)に通っていました。この学校は、学年段階によって校舎が異なる学校で、私は第4学年から第6学年までを指す *mellanstadiet* と呼ばれる段階が在籍する校舎で教育実習を行いました。担当教員は、テキスタイルスロイド科という教科を専門とする先生で、主に美術科とテキスタイルスロイド科の授業を受け持っていたため、私も基本的にそれらのクラスに入りました。スロイド科とは、北欧に

おける手工教育を指します。テキスタイルスロイド科において児童は、布や生地を使って自分の好きなものを手縫いまたはミシン縫いで作る活動を主に行っていました。

担当教員と一日中行動を共にするため、いろいろな話をすることができました。スウェーデンと日本の教育方針、重点の置き方、教員の働き方など、お互いに大きな発見があり担当教員と話す時間は非常に楽しく有意義に感じました。子どもたちの中には、驚くほど英語を話すことのできる子どももいますが、ほとんどの子どもは英語を話すことに躊躇するため、なかなかコミュニケーションを図ることに最初苦戦しました。しかし、だんだん大学で習っているスウェーデン語を使ったり、子どもたちにスウェーデン語の言い方を習ったりするようになってから、距離が一気に縮み彼らも英語を頑張って話そうとする姿勢を見せてくれるようになりました。

担当教員と実習で行う授業プランを練り上げながら、子どもたちとの距離を徐々に縮めていた矢先に帰国が決まり、教育実習は中断となりました。しかし、さまざまな知識や考え、経験を得ることができました。

2. 生活の状況

1月上旬に秋semesterをともに過ごしていた仲間が去り(留学生のうち8割ほどは1タームのみで帰ってしまいます。)、名残惜しみながらスウェーデン語の集中講義に取り組むうちにあっという間に1月は去っていきました。秋semesterでの悔いをバネに、春semesterからやってきた留学生に積極的にかかわったため2月初めには友達にも多く恵まれました。また、留学当初から仲良くしてくれているスウェーデン人の仲間たちともさらに仲を深めていました。

COVID-19について。1月はまだ「中国のほうで大変なことが起きているな」という認識でした。2月になりイタリアでの感染が拡大したことで、ちらほらと大変だねというような話が出ていましたが、だれも(私自身含め)自分事としては捉えてはいない雰囲気が、3月上旬から変わり始めました。まず、スーパーでトイレットペーパーが面白いほどきれいになくなりはじめ、アジア人に対する差別(実際に私の日本人の友達も、街の中でマスクをして歩いていたところCOVID-19についてきつい言葉をかけられていました)も少し見られるようになりました。そして、アイルランド、香港、韓国、ベルギー、アメリカなど様々な国の留学生が続々と帰国を決め始めました。3月中旬(2週目末だったと記憶しています)には、大学も全授業をオンラインに移行することを発表し対面の授業は全く行われなくなりました。

できる限り長くいたいと願っていましたが、日本でもスウェーデンでも刻一刻と(文字通り毎日何か変化が起きました)変わる状況や感染状況に頭を悩ませられ、正直追い詰められていました。さらに、オンライン授業への移行が決定したため今後の留学をどうするかとい

うことに真剣に悩みました。結局、飛行機の便が続々とキャンセルになっていること、国境封鎖が相次いで行われていることから、帰国できなくなる可能性があるのではないかと危惧し帰国を決断しました。本当は、留学でやり遂げたかったことを完全には終えることができなかったため、とても、とても苦しい決断でした。もし、スウェーデン人の友達たちが毎日温かく優しく寄り添ってくれていなければ、気持ちがダメになってしまっていたのではないかと思うくらい心をすり減らすことになる期間でした。

終わりこそバタバタしてしまいましたが、トータルで見ると非常に有意義でかけがえのない経験を、派遣留学を通して得ることができました。これもひとえに、このようなチャンスを与えてくれた千葉大学と、留学生生活をずっとサポートして下さった留学生課の皆様のおかげです。本当に、ありがとうございました。